

実的なものの現象学の限界

命題のスペチエス説はなぜ放棄されたのか

植村 玄輝*

1900/01年に公刊されたフッサールの『論理学研究』(以下、『論研』)¹は、12年後の著者自身によって「突破口の著作」(XVIII, 8, B)と呼ばれている。だが、この突破口はいったい何によって穿たれたのか。われわれは本稿を通じて、この問いに一つの回答を与えたい。それは、ボルツァーノに由来する「命題 Satz」概念の導入²がフッサールに突破口を与えた、というものである。真ないし偽という性質の担い手としての命題こそ、『論研』全体の一貫した主題であり、同書の統一的な理解のための導きの糸である。しかし、『論研』の命題概念は、フッサールに対して、同書の公刊後に彼が立ち向かうことになるある困難を突きつけるものでもあった。フッサールがいみじくも述べるように、突破口は「終点ではなくむしろ端緒」(ibid., B)にすぎなかったのである。

われわれの目的は、フッサールがこの端緒において見た光景とそこから踏み出された最初の足取りとを明らかにすることである。具体的な問いに言い直せば、こうなる。『論研』の命題概念はどのような困難をどう引き起こしたのか、そして、この困難はどのようにして解消されようとしていたのか。

われわれはまず、命題概念の導入が真理の客観性の説明を目的としていることを確認し (1)、命題が現象学的分析にどう位置づけられるのかを示すことで、『論研』の命題論(スペチエス説)の内実を明らかにする (2)。つぎに、スペチエス説が放棄される理由を、『論研』内部で生じる困難から説明する (3)。最後に、この困難を解消するために採用される新たな命題論を簡単に確認し (4)、それがもたらす帰結を瞥見する (おわりに)。

1. 命題と真理の客観性

フッサールにおける命題とは何か、という問題からはじめよう。フッサールが命題を必要としたのは、真理の客観性を説明するためである。学問が獲得する真理はわれわれが捏造するものではなく、学問の体系性は恣意的な構築物ではない (XVIII, 21, 30-1)。われわれは学問的認識において、真理を発見するに過ぎない。このような事情を説明するために、フッサールは『論研』第一巻において命題の存在を認めるのである。

真・偽という性質を持つのは命題であり (XVIII, 145, 155, 164, 180, 242)、命題は変化を免れた存在者なのだからその真偽もまた変化しない (XVIII, 124-6, 148)。客観的な意味での理論や学問は命題の体系であり (XVIII, 119, 245)、学問・理論の可能性の条件を探

*mail: sachverhalt@gmail.com

¹ 本稿で引用・参照される『論研』は、特に断りのない限り第一版である。第二版以降に言及する際には、ページ数の後に「B」と記す。

² なお、ボルツァーノの「命題自体 Satz an sich」の導入は、遅くとも1896年の論理学講義においてなされている (Mat. I, 44-53)。

求する学問論において純粹論理学が最重要部門と見なされるのは、それが命題およびその複合の形式的構造を研究するからである (XVIII, 244-5)。そしてこれらの積極的主張だけでなく、執拗なまでの心理主義的論理学批判もまた、命題の承認を動機づけるべくなされている (XVIII, 77-8, 90-1, 96-7, 165, 192)³。

とはいえ、命題を上のように特徴づけられた限りでの存在者として認めるだけでは、真理の客観性の単なる承認以上の何かをしたことにはならない。それは「真理の客観性の説明」と呼べる代物ではあきらかにない。かくして、命題概念の内実を明らかにすること (解明 Aufklärung) という課題がフッサールに与えられ、これが続く『論研』第二巻の主題をなすことになる。

だがすでに第一巻において、フッサールはこの課題のための予備的な主張を二つしている。第一に、命題は文の意味であり (XVIII, 140, 166, 180n, 220)、文を理解したときにわれわれが把握するものである。この意味がわれわれの誰によっても把握可能であるかぎり、真理の客観性は保証される⁴。そして第二の主張は、この第一の主張をさらに敷衍したものである。

諸体験はレアールな個別者であり、時間的に規定され、生成消滅する。しかし、真理は「永遠」であり、あるいはより適切には、一つのイデーであり、そうである以上、超時間的である。真理に時間内のある時間位置を指定したり、あるいはたとえあらゆる時間を貫いて広がる持続であるにせよ、一つの持続を指定することは、まったく無意味である。たしかに真理について、それがたまたまわれわれの「意識に到来し」、そうしてわれわれによって「把握」され、「体験」される、とも言われる。しかし把握・体験・意識することは、この〔真理という〕イデア的存在に関係するここでは、経験的存在、すなわち個体的に個別化された存在に関する場合は、まったく別の意味でそう言われているのである。われわれが真理を「把握」することは、心的諸体験の流れのうちに浮かび上がっては再び消え去りゆくような経験的内容を把握することと同じではない。真理〔の把握〕は諸現象の間の現象ではなく、それはあのまったく別のいみにおいて、すなわち、ある普遍者〔の把握〕が、あるイデー〔の把握〕が体験であるといういみにおいて体験なのである。あるスペチエス Spezies についての、たとえば赤「一般」についての意識を持つのと同様に、われわれは真理についての意識を持つのである。(XVIII, 134-5; cf. 108-9, 193, 231-2)

命題は普遍者・スペチエス (以下、われわれは両者を同義語として扱う) であり、命題とそれを把握する体験との関係は例化ないし個別化関係である。われわれはこの説を、「命題のスペチエス説」ないし「スペチエス説」と呼ぶ。では、命題のスペチエス説は、『論

³ 真理の絶対的な客観性およびそれを担保するものとしての命題、という発想のより直裁な表明として、1906/07年の講義 (XXIV, 25-6)を参照。また、この絶対的ともいえる真理観は、後期に至るまでフッサールによって保持され続けている。この点に関しては、三上 (1997)を参照のこと。
⁴ したがって、フッサール自身が「意味のイデア性」といういささか間延びした名称を与えた問題とは、真理の客観性の問題に他ならない。この点を考慮せずにフッサールにおける「意味」や「意味のイデア性」を論じることは、程度の差はあれははずれなものにしかならない。

研』第二巻でいかにして詳述されたのか。

2. 命題のスペチエス説：『論研』期 (1900-03)

われわれはまずスペチエス説を脇に置いた上で、命題についてフッサールに即して考えてみよう。というのも、そうすることによってのみ、『論研』のフッサールが他ならぬこの説を必要としていた理由が理解可能になるのである。

命題は変化を免れた存在者であり、文の意味として把握される。真理とは真なる命題のことなのだから、真理の把握（認識）は、明証的な判断作用において使われた文の意味を把握することである。だが、文の使用、あるいはより一般的に、有意味な記号の使用とはそもそも何か。最初に問題にされるべきは、この点である。こうして、志向的体験という『論研』第二巻の諸研究における探求の対象は、「何らかの言語表現に属し、言語表現とともに現象学的統一を形成する」(XIX/1, 8)ものとして特徴づけられるのである。この現象学的統一を「表現」と名付け分析する第一研究から、真理の把握を扱う第六研究に至るまで、『論研』の現象学の主題は、記号を有意味に使用することという作用に他ならない⁵。

問題の現象学的統一、つまり表現作用にとって、それが対象に関係することは本質的である (XIX/1, 59)。だが、われわれはある表現を、その対象が直観できなくても有意味に使用できる。さらに、千角形のように思い浮かべることが困難な対象や、丸い四角のように思い浮かべることが原理的に不可能な対象についてさえも、われわれは表現できる。よって、「表現作用の対象への関係」ということで考えられているのは、表現作用の遂行者が表現の対象を直観することでも、その想像心像を持つことでもない (XIX/1, 44, 62-6; XIX/2, 611-2)。対象の現前（充実）と不在（空虚）という違いは、作用の対象への関係の様態の違いであって、対象への関係が成り立っているかないかの違いではない。つまりフッサールによれば、何であれ記号が有意味に使用されたならば、その使用はかならず何らかの仕方対象に関係するのである。

すると、表現の意味は、その使用が関係する対象（志向的对象）によって特徴づけられるかもしれない。だが、この方針には二つの問題がある。第一に、有意味性と対象への関係性を緊密に結びつけつつも、フッサールは意味と対象の区別を論じている (XIX/1, 52-3)。第二に、フッサールは有意味な表現が「対象を欠く *gegenstandlos*」ケースも認めている (XIX/1, 60)。

しかしこれらの発言にもかかわらず、『論研』のフッサールは、志向的对象から表現の意味を説明する方針を語っている⁶。体験を実的に超越した内容（志向的内容）をめぐる第五研究の議論において、「志向されているがままの対象」が「志向されている当の対象それ自体」から区別され、前者が志向的内容と見なされるのである (XIX/1, 414)。

⁵ この考えは、フッサールの作用概念をブレンターノのそれから決定的に分け隔てる契機となる。一方で記述的心理学のプログラムを踏襲しながらも、他方で言語の使用によってはじめて遂行される作用に着目することで、フッサールはブレンターノの内主義的作用観から離脱するに至るのである。以上の点に関しては、植村 (2007)を参照されたい。

⁶ 命題についての『論研』の叙述に動揺があったことは、『イデーニ I』においてはっきりと指摘されている (III/1, 132)。

だが、規定を受けた限りでの対象を内容として扱うことによって、フッサールはここで対象それ自体とは別に存在する第二の対象を導入しているわけではない。志向的对象は、「たとえばわれわれが一軒の家を表象しているならば、まさにその家である」(ibid.)のだから、両者の区別は、同一の対象のいわば内側でつけられているにすぎない⁷。

以上のような説明の方針は、その内実をより明らかにするという重大な課題を抱えてはいるものの、少なくとも「対象を欠いた」表現以外については見込みがないわけではない。複数の異なる作用が同一の対象に関係しうるのだから、この説明は説明されるべき事柄(命題は判断作用の多様を貫く同一者である)に適合するように思われる⁸。また、「存在しない対象」を真正の対象と認めさえすれば、あらゆる表現の意味を説明することも不可能ではないだろう。そしてフッサールが次のように述べるとき、まさにそのような決定がなされているようにも見える。

現象学的考察にとって、対象性それ自体は無に等しい。なぜなら、一般的に言って対象は作用にとって超越的であるからである。どのような意味で、またいかなる権利で対象性の「存在」が論じられようと、あるいはまたその対象性が実在的であろうとイデア的であろうと、あるいは真に存在するのであると可能的に存在するのであれ存在不可能であろうと、これらのこととは無関係に、作用は「対象に向かって」いる。[...]対象に関係することは体験可能な特性であり、そしてこのような特性を示す体験は、(定義より)志向的体験または作用といわれる。対象への関係の仕方の相違は、すべてそれら志向的諸体験の記述的相違である。(XIX/1, 427)

だが、われわれは『論研』のフッサールが現象学の記述領域に与えた規定と、それが意味することをここで思い出さなければならない。志向的对象は「現象学的に実現されていない客観」であり、その存在や内実をめぐる問題にかかずらうことは、現象学とは無関係な「形而上学」なのである(XIX/1, 25)。現象学が関わるのは、体験の実的成素に限られる。それでもなお現象学的分析が「対象への関係」を扱いうるのは、それが現象学的に記述可能な内容に、つまり体験の実的成素がもつ単項的(非関係的)性質に還元可能であるからに他ならない。

したがって、フッサールが「対象への関係の仕方の相違は、すべてそれら志向的諸体験の記述的相違である」と述べるとき、そこで想定されているのは、問題の相違を、作用の実的成素が持つ単項的性質の相違から説明する、ということである。そしてこのよ

⁷ 志向的对象と現実に存在する対象を区別する志向性理論は、『論研』第五研究(XIX/1, 436-40)を筆頭に、フッサールが幾度となく批判を繰り返してきた立場である(III/1, 89-91, 206-9, 297-8n; XXII, 343-4; XXVI, 40-8; XXXVI, 13, 39, 66-7, 106-7)。これらの議論において批判が向けられる立場が、作用の実的成素のなかに第二の対象を指定するものとして定式化されていたことは、ここでは特に問題にならない。志向的对象を作用の外に追放したとしても、それを外的な対象と並んで別に存在するものと見なすならば、事情は同様である。

⁸ だが、この見込みはそのまま達成されるわけではない。内容としての志向的对象はそのつどの作用の相関者なのだから、複数の作用が関係しうるものではないのである。Chrudzinski(2002, 196-200)を参照。なお、この点は1908年以降のフッサールの命題論にとっての課題であり、本論末尾で示される問題の一部をなす。だが、われわれはそれに詳しく立ち入ることはできない。

うな志向性理論のもとでは、「対象を欠いた」表現の問題は最初から無縁である。「作用の対象への関係」は、その対象が存在しようがしまいが、当該の作用がある特定の単項的性質を持っていること以上の何かを意味しない。そして、作用の対象の存在と非存在をめぐる形而上学的問題は、現象学の関わるところのものではない⁹。

だが、ここには新たな問題がある。体験の实的成素はすべて生成消滅するのだから、そのうちの何かを命題と見なすことは、自らが退けた心理主義への後退に等しいのである。したがってやはり、何らかの仕方でも作用を实的に超越した領分に命題が確保されなければならない。命題のスペチエス説は、このような事情を背景にして主張される。

意味の本質を、われわれは意味付与的体験のうちにはなく、意味付与的体験の「内容」のうちに見るのであるが、この内容は、話者および思考する者の現実的ないし可能的体験の多様性に対して、同一の志向的統一を呈示している。(XIX/1, 102)

[...] われわれがここで主張する〔命題の〕真の同一性とは、スペチエスの同一性にほかならない。[...] アイデア的単一的意味に対するさまざまな個物とはもちろん、対応する意味作用の作用モメント、すなわち意味志向である。したがって、意味のそのつどの意味作用に対する [...] 関係は、たとえばスペチエスにおける赤の、これと同じ赤色を「持っている」ここにある細長い紙片に対する関係と同じである。(XIX/1, 105-6)

命題は作用の实的内容として個別化される普遍者であり、文の意味を理解するときわれわれが把握しているのは、作用の实的内容ではなく、それを個別例として持つ普遍者である。したがって、繰り返し立ち戻り可能な同一者としての命題をわれわれが手にしているとき、われわれは实的内容にもとづいた抽象作用（イデー化的抽象）を遂行しているのであり（XIX/1, 108）、真理の把握は、明証的な判断作用の实的内容からの抽象作用において達成される¹⁰。

『論研』公刊直後の自己評価にしたがえば、スペチエス説は、同書の最大の画期的功績の一つである。1903年に公刊されたパラージ書評において、フッサールはおおよそ次のようなことを述べている。「存在と非存在の間を漂う神話的な存在者 *Entität*」(XXII, 156)に見えるボルツァーノの命題自体は、スペチエス説によって理解可能にされた。だが、

⁹ 1903年に公刊されたエルゼンハンス書評において、『論研』の現象学の方針はより露骨に語られている。「現象学的記述は、厳密ないみにおける与えられたものに、つまり、それ自身においてあるがままの体験に着目する。その分析は、たとえば事物の現出を分析するが、そのうちで現出するもの *Erscheinendes* [=現出者] は分析しないのであり、それのおかげで現出と現出者が自我に対する相関関係に登場するような統覚を退けている」(XXII, 207)。『論研』期の現象学が標榜する形而上学的中立性については、近年その解釈・評価をめぐって論争が生じている。現状の明晰な概説として、Zahavi (2002)を参照。

¹⁰ 前節末尾の引用を参照。なお、「判断作用の内容」の内実を明らかにするために、フッサールは第五研究において作用の質料と性質を区別し、命題が質料に個別化されるスペチエスであることを論じている。残念ながら、われわれにはこの点を詳述する余裕がない。なお、ボルツァーノの命題自体を適切に救うことをフッサールにとって可能にしたのは、ブレンターノに由来する質料と性質という概念対の導入による。この点に関しては、Benoist (2002, 151-71)を参照のこと。

スペチエス説の利点はこれとどまらない。命題と作用の関係を例化関係として考えるというまさにこのことによって、フッサールはボルツァーノがまったく展開できなかった理論、すなわち現象学へといたることができたのである (XXII, 157)¹¹。

しかし、それから 15 年後のインガルデン宛書簡 (1918 年 4 月 15 日付)の中で、フッサールはスペチエス説が『論研』の最大の誤りであったことを告白している。

全体的に見て、私は当時、つまり『イデー』よりもずっと前に、決定的な洞察に迫っていました。『プロレゴメナ』の立場を、私はずっと前に不当なものとして、あるいは、ただ本質真理についてのみ正当なものとして認識していたのですし、本質真理と事実真理とのあいだの基礎的差異の諸根拠を、私は明らかにしたのです。誤りは何よりもまず、述定的な判断命題・意味に関する判断体験における「意味」と「命題」を本質として、あるいは本質 (スペチエス) といういみにおける「イデー Idee」として捉える点にありました。一つの命題が偶然的な判断および判断者から独立しているということはまだ、イデーの同一者があるスペチエス的なものであるということの意味しません。(BW III, 182)

この態度の変化は、何に起因するのか。書簡の文面から窺い知ることができるのは、命題のスペチエス説は、事実真理、たとえば個別の時空的対象に関わる真理に関する正当な説明を与えられない、という点である。だが、なぜ説明がうまくいかないのか。われわれはその最大の理由の一つを、『論研』の真理論の中に見ることができる。

3. 『論研』の四つの真理概念

フッサールが命題を必要としているのは、真理の客観性を説明するためであった。真・偽という性質を持つのが命題であるならば、われわれの誰もにとって、文の意味としての命題に繰り返し立ち戻ることが可能でなければならない。そして、命題とそれを把握する多様な体験との関係を、普遍者と個別例との関係と見なすことによって、ただ単に謎めいた存在者を認めることよりも優れた議論がなされるのである。だが他方で『論研』には、これとはまったく異なった真理概念も紛れ込んでいた。それは、「真に存在する *wahrhaft-sein*」といういみでの真理という考えである。そして、これら二つの真理概念を同時に持つことは、フッサールをある困難へと追い込む。

われわれはまず、第六研究において提示された四つの真理概念を手掛かりにしよう¹²。フッサールはそこで、自身の枠組みの中で「真理」と呼ばれうるものを四つ挙げている。

(1) 思念されたものと (直観によって)与えられたものとの一致

¹¹同様の主張はすでに『論研』に見られ (XVIII, 226-9)、後年にも繰り返されている (III/1, 218-9n; V, 57-8)。

¹² 以下は、第六研究第 38 節 (XIX/2, 651-3)を再構成したものである。再構成にあたってわれわれは Tugendhat (1970, 91-6)および Benoist (2002, 200-8)から多に益を得たが、両者の見解およびわれわれの解釈の三つは、それぞれ互いに異なる。いくつかの相違点のうち、われわれは目下の論点に関連するものだけに、以下で言及する。

- (2) 完全に充実した判断作用という理念
- (3) 対象そのものの存在 (事態の成立)
- (4) 正当性を持ったスペチエスとしての命題

問題の困難は(3)と(4)を同時に認めることによって生じるのだが、それを理解するためには、四つの真理概念の内実を順番に確認する必要がある。

(1)が意味するのは、明証的な判断作用の対象側の相関者であり、ここで登場する「一致」は、(たとえば信念状態と世界とのあいだの)対応関係ではない。問題の二つの項が一致していることとは、<空虚な意味作用の対象そのもの>と<それに充実を与える直観作用の対象そのもの>とが同一であるということであり、同一性を対応関係の極限として考えないかぎり、これを「対応」と呼ぶことは許されない。

つぎに、(2)で問題とされているのは、(1)の作用側の相関者、つまり厳密には「真」ではなく「明証的」と形容されるべき判断作用である。判断作用に関して真であるという(厳密さをやや欠いた)言い方ができるのは、それが事態に空虚に関わっているだけではなく、当該の事態が成立していることを直観する作用(カテゴリー的直観)と融合しているときに限られる。だがここで、(1)では問題にされなかった事情を考慮しなければならない。というのも、直前の節で示されたように(XIX/2, 646-50)、外的知覚にもとづく判断作用の場合、それを充実する作用は、対象をつねに不完全にしか与えないのである。この種の判断作用の充実には段階が認められ、対象の全体を直観する完全に充実した判断作用は、この段階の極限という「理念 Idee」としてのみ考えられうるものと見なされることになる¹³。ところで、『論研』において「作用の対象への関係」は作用の実際の内容から説明されるのだから、(1)は(2)に還元されることになる。つまり、(1)ある判断作用とそれを充実する直観作用とが同一の対象に関係することは、(2)当該の判断作用が完全な充実という理想的な認識状態のもとで遂行されていることとして説明される。

以上の検討によって、(3)の根本性が浮き彫りになる。(2)明証的な判断作用は、成立している事態の直観を不可欠な条件とし、そしてそれによって説明される真理とは、(1)成立すると見なされた事態が現に成立しているということである。成立している事態は、それが(1)や(2)を派生的な真理概念として可能にするという意味で、「真にする *wahrmachend*」ものである¹⁴。この真理概念はスペチエス説に紛れてすでに『論研』第一

¹³ Tugendhat (1970, 95-6)は、理念として解されるべき「イデー」をスペチエスの意味での「イデー」と混同し、(2)についての的はずれな批判をしまっている。命題のスペチエス説と第六研究の間に断絶が見られること(われわれが以下で示すのもこれである)を指摘する彼の批判は、むしろ(4)に対して向けられるべきであった。

¹⁴ここで、「真にするものについての理論 *truthmaker theory*」へのコミットをフッサールに認めることは難しい。というのも、この理論の目的の一つは、真にするもの *truthmaker* と真理値の担い手 *truth bearer* との必然的な対応関係から真理を説明することだが、フッサールはそのような対応説的な真理概念を(少なくとも第一義的なものとして)持っていない。ただし、この理論が含意するより弱いテーゼ「真理は存在に付随する *truth supervenes on being*」には、フッサールもまた(少なくとも一定の留保付きで)同意するだろう。相対主義への第四の批判(XVIII, 126-7)を参照のこと。真にするものについての理論および「真理は存在に付随する」というテーゼについての簡潔な解説として、Beebe & Dood (2005, 1-4)を参照。

また、Benoist (2002, 205)は“*wahrmachend*”を“*vérfiant*”と訳して検証 *vérification* と関連させつつ、

巻にも登場しているのだが (XVIII, 31, 129, 193, 233, 243)、これを第一義的な真理概念と見なすことによつて、フッサールは困難に直面するのである。

真理の把握は、真に存在するものとしての〈成立している事態〉の把握、つまり事実の把握である。そして事実の把握は、実的なものの現象学という要請にしたがつて、(2)のように説明されなければならない。だが判断作用は、たとえ理想的な認識状態において遂行されているのだとしても、あくまでも生成消滅する個別的な出来事である。したがって、判断作用の実的内容は、事実の客観性を説明できない。こうしてフッサールは、命題のスペチエス説にコミットし、判断作用の多様を貫く同一の内容としての命題を理論の中に組み込まざるを得なくなる。その結果得られるのが、(4)である。しかしこのとき、〈事実を判断作用の対象として直観的に把握すること〉として対象の水準において説明されるべき真理の把握は、判断作用に個別化されるスペチエスの把握として、対象とは厳格に区別された意味の水準において説明されている。つまり、第一義的な真理の把握を説明しようとする、それとは別の真理概念を第一義的なものと見なすことになってしまうのである。これが、フッサールに生じる困難である。

この困難は、上で引用したインガルデン宛書簡の中で語られているように、事実真理の説明の際に決定的に深刻になる。個別の時空的対象と個別の性質 (モメント) からなる事態は、普遍者ではなく個別者である (XVIII, 126)。このような事態の把握としての真理の把握は、どう転んでもスペチエスの把握ではありえない。

すでに触れたように、少なくとも 1903 年まで、スペチエス説には高い自己評価が与えられていた。しかしまもなく、この説をめぐるフッサールの発言の歯切れは悪くなっていく。1905 年の判断論講義では、命題が抽象によって得られる本質・スペチエスであることが一方で述べられつつも (Mat. V, 11-2, 74, 96)、命題の把握については詳述されず、そこには困難があるとしか述べられなくなる (Mat. V, 24-5, 32)。1906/07 年の学問論および認識論講義になると、フッサールはさらに動揺を見せている。命題はスペチエスではないという断言がされる一方で (XXIV, 45)、作用の多様に対する命題の同一性が問題になると、スペチエス説が復活するのである (XXIV, 324)。おそらくこのあたりの時期に、フッサールは上述の困難に気付きつつあった。そして 1908 年夏学期の意味の理論講義 (以下、『意味の理論』) において、表現の意味をめぐる問題が再検討され、新たな命題概念が提出されることになる。この命題概念こそが、意味と対象を同一の水準で扱うことを可能にし、『論研』の困難を解消するのである。

4. 『意味の理論』講義 (1908) における新たな命題論

フッサールの新たな命題論の方針は、『論研』ですでに語られており、われわれはすでにそれに言及している。フッサールは表現の意味を、表現作用の志向的对象によって説明するのである。

(3)を認識的に特徴づけられるものと見なしている。だがこれは、“vérifier”のニュアンスに寄りかかった強引な解釈のように思われる。第六研究での(3)の説明は、むしろそのような定義をまったく示唆しないのである。第一義的な意味での真理を認識作用 *connaître* と見なす Lavigne (2004) もまた、ブノワよりもさらに致命的な誤解をしている。

もしわれわれが、同一の対象性が二つの異なる表現において「意味される」のを見だし、〔…〕しかも対象性に定位して意味を探し出そうとするならば、ただちに次のような区別に気が付かなければならない。つまり、〈そこで意味されている対象性〉と〈それが意味されているような仕方における対象性〉との区別である。〔…〕あきらかにわれわれは、〈事象それ自身〉と〈そこでそれが述べられているような仕方において受け取られた同一の事象〉を区別できる。いまや、われわれがここで「異なる言われたこと」や「異なった言表の仕方」という名称のもとで明らかにしたことが、「意味」の新たないみを与えるのである。(XXVI, 28)

フッサールはこの新たな意味概念を「存在的 ontisch 意味」ないし「現象学的意味」と呼び、従来のスペチエスとしての意味（「現出の意味」ないし「現出論的意味」）から区別する (XXVI, 35)。すでに確認したように、このような立場においては、意味と対象は別個の存在者として区別されないのだから、事実としての真理は、事実とは別のカテゴリに属する存在者を持ち出さずに説明される。

だがこの方針転換にともなって、フッサールの立場には次の三つの根本的な変化がもたらされている。(i)作用の対象への関係を作用の単項的性質に還元する『論研』の立場を放棄して、フッサールは「対象への関係」を実質的な意味で理解する対象論的な立場へと移行している¹⁵。この移行は、現象学の記述範囲が志向性対象にまで拡張されたことを意味する。(ii)この拡張によって、フッサールは『論研』において自身が無縁だと考えていた形而上学的問題、体験を実的に超越した対象の存在をめぐる問題に足を踏み入れている。(iii)そして、フッサールがそこでコミットする形而上学的主張は、後に超越論的観念論として洗練されるものである。

順番に確認しよう。(i)1908年のフッサールは、『論研』と同じく、命題を意識の実際的成素と見なすことを誤謬と見なしている (XXVI, 31)。よって、存在的意味と見なされる志向的对象は、意識を実的に超越してなければならない。

(ii)だが、あらゆる作用に志向的对象を対応させるためには、「対象を欠いた」表現の問題を解決しなくてはならない。丸い四角のように存在しえない対象についてもわれわれは何かを語りうるのだから、すべての作用は対象に関係しているという主張は、そのまま通用させることができない。この問題についてのフッサールの対応策は、きわめて単純である。フッサールは対象概念を拡張し、存在しない対象を真正の対象として認めるのである。何か対象であることは、それについて述定する作用が遂行可能であること以上の何かをもはや意味しないのである (XXVI, 50-1, 60-1, 161)。かくして、あらゆる表現作用について、その対象への関係は実質的なものとして考えられ、現象学の記述範囲には、志向的对象も収められることになる。

(iii)これだけではまだ、「対象を欠いた」表現の問題は完全に解決されていない。真に存在する対象とそうでない対象との区別が説明されないかぎり、志向性対象論は不完全である。そしてこの問題に答えるために、フッサールは超越論的観念論に向かって決定的に重大な一步を踏み出す。

¹⁵媒介論と対象論の区別については、Chrudzimski (2002, 186-7)を参照のこと。

判断とは同一性の確信であり、同一性は成り立っていたりいなかったりするのだが、それは判断の真偽に応じてそうなっているのである。(XXVI, 51)

すべての判断作用は無条件に何らかの対象へと関係し、その対象が真に存在することは、当該の判断作用の明証性から説明される。1908年のフッサールにとって、意識を超越して存在する対象は、もはやそれを体験する意識なしに考えることができないものなのである¹⁶。

おわりに

1908年のフッサールは、意味を対象とは別の水準に立てずに扱う手だてを見だし、事実という第一義的な真理概念をめぐる『論研』の困難を解消しつつある。そしてこの手だては、フッサールを超越論的観念論へとコミットさせる決定的な契機になっている。最後にわれわれはここで生じる問題の一つを瞥見し、結語に代えたい。

フッサールが意味としての命題を必要としたのは、真理のイデア的客観性を説明するためであった。『論研』で命題が超時間的な本質と見なされたのも、真理が言葉のもっとも強い意味で誰も *jedermann* に把握され、繰り返しそこに立ち戻ることができるものであるという点を、それがうまく説明するからに他ならない。だが、1908年の新たな命題論では、命題は事態と同一視されている。したがって、事実真理 (事実に関する真なる命題)はすべて、いわば世界の中に引きずりおろされ時間位置を与えられることになる。だがこのとき、そもその問題であった真理のイデア的客観性の説明は、まだ手付かずなのではないか。それどころか、事実真理が時間的であるならば、その客観性はもはやイデア的ではありえないのではないか。だが、上のインガルデン宛書簡が明白に示すように、フッサールは事実真理のイデア性という考えを放棄したわけではない。『意味の理論』以降のフッサールは、事実真理のイデア性を新たな命題論の枠組み内で説明するという課題に取りかかるのである。フッサールはそこで、スペチエス説への後退とその克服という曲折を経て、真理のイデア性のもう一つの意味、カント的な意味での理念 *Idee* という発想を明確にすることになるのだが、われわれにはもはやそれを論じる紙幅の余裕はない。問題の所在を示したことで満足し、議論を終えることにしよう¹⁷。

¹⁶超越論的観念論についての集中的な考察が開始された最初期の草稿 (XXXVI, Nr. 1-4)は、1908年秋 (『意味の理論』講義の終了直後)に成立している。この事実は、われわれにとって極めて示唆的である。また、われわれが辿ってきた超越論的現象学への道が、現象学的還元という方法とは (少なくとも表面上)無関係に踏破できるものであることは、特筆すべきであるように思われる。
¹⁷ 本稿は、第五回フッサール研究会における発表「言表作用への反省の限界：命題のスペチエス説はなぜ放棄されたのか」を改題・改稿したものである。発表の際に批判・コメントをくださった諸氏および本稿のアドヴァイザー、宮原勇教授に感謝する。なお、本稿は筆者が筆者が日本学術振興会特別研究員として文部科学省科学研究費 (特別研究員奨励費)の交付を受けて行った研究成果の一部である。

参考文献

*フッサールからの引用・参照は、以下の要領で行った。

Husserliana (Nijhoff / Kluwer / Springer, 1950-):

ローマ数字で巻数を、アラビア数字でページ数を記す。

Husserliana Materialien (Kluwer / Springer, 2001-):

「Mat.」と略記し、ローマ数字で巻数を、アラビア数字でページ数を記す。

Briefwechsel (Kluwer, 1994):

「BW」と略記し、ローマ数字で巻数を、アラビア数字でページ数を記す。

Beebe, H. & Dood, J. (2005) "Introduction", in H. Beebe & J. Dood (eds.) *Truthmakers: The Contemporary Debate*, Oxford University Press, 1-16.

Benoist, J. (2002) *Entre acte et sens : La théorie phénoménologique de la signification*, J. Vrin.

Chrudzinski, A. (2002) "Von Brentano zu Ingarden. Die phänomenologische Bedeutungslehre", *Husserl Studies* 18: 185-208.

Lavigne, J.-F. (2004) "Etre en soi et vérité en soi dans les Prolegomènes à la logique pure", *Philosophie* 83: 59-77.

Tugendhat, E. (1970) *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*, 2. Aufl., Walter de Gruyter.

Zahavi, D. (2002) "Husserl's Metaphysical Neutrality in *Logical Investigations*," in D. Zahavi & F. Steierfeldt (eds.), *One Hundred Years of Phenomenology. Husserl's Logical Investigations Reconsidered*, Kluwer, 93-108.

植村 玄輝 (2007) 「内世界的な出来事としての作用：ブレンターノ、フッサール、ライナッハ」(『現象学年報』23 に掲載予定).

三上 真司 (1997) 「フッサールと実在論の問題 (II)」, 『横浜市立大学論叢人文科学系列』, 48/1: 47-81.